

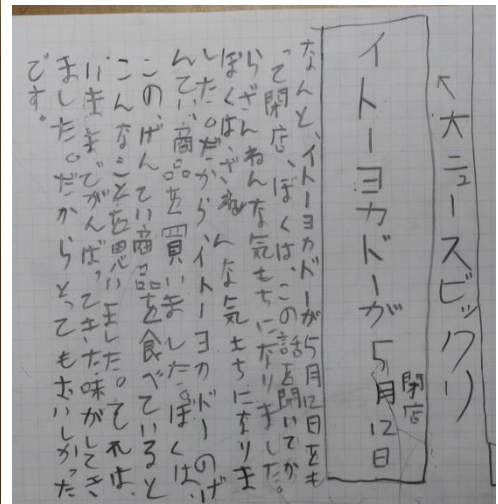
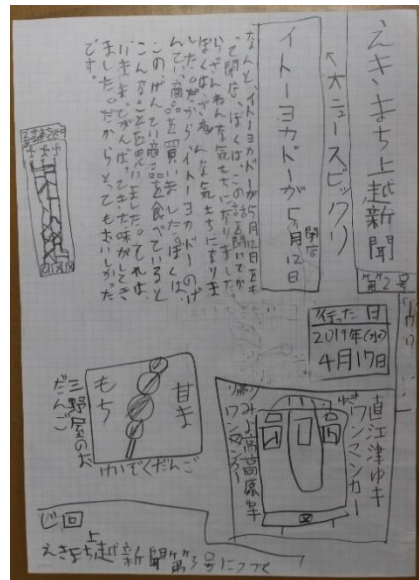
上越教育大学研究プロジェクト 終了報告書（若手研究）

研究代表者 所属・職名 附属小学校 教諭

氏 名 寺島 克郎

研究期間 令和元年度

研究プロジェクトの名称	表現効果と伝達機能に着目した言語運用学習モデルの構想 －壁新聞を定型とした報告文作成指導－
研究プロジェクトの概要	<p>本研究プロジェクトは、小学校3年生を対象とし、言語運用学習モデルを構想するにあたり、壁新聞を定型とした報告文を中核として活動をつくる点、及び、そこで言語の伝達機能と表現効果に着目する点に特色がある。また、取材の対象を総合的な教育活動を中核とする学校生活全般とすることで、実際の経験をリアルに報告する表現方法の豊かさや多様さに迫る点にある。小学校3年生にとって壁新聞を定型とした報告文は、相手意識や目的意識を明確にし、個の創造性を多様に発揮しながら探究を深められる活動であると考え。その活動過程では、それまでの生活経験や教科書教材文などを通して出あってきた言語表現から感受してきた報告文や説明文に関する語句・語彙の運用など、個の中に蓄積されてきた言語感覚が自己の表現を構成する際に発揮されると考える。</p>
<p>研究 成 果 の 概 要</p> <p>※申請時にチェックした「取組課題」との関連とその成果も明記すること。</p>	<p>○ 研究・活動の環境設定</p> <p>研究の対象とした、上越教育大学附属小学校3年1組において、児童は総合的な教育活動「えきまち上越」を中核とする学校生活を、レポート用紙（A4版）に、自分の「えきまち上越新聞」として表現することに継続して取り組んだ。</p> <p>研究を始めるにあたって、まず、新聞紙面のおよそのつくりを確認した。具体的には、新聞紙面の要素として、リード（見出し）とテキスト（本文）、レイアウト（記事の配置）、イラストや写真の活用と配置があることを確認した。児童が自分らしい表現をつくることを重視することから、新聞紙面のおよそのつくりを確認した後、自由に新聞づくりに取り組み始めるようにした。また、2学期以降、児童が、日常的に新聞にかかわること、及び、多様な見出しと本文、レイアウトに出あうことを意図し、学級で「上越タイムス」紙を購読することとした。児童は国語科の時間や休み時間に「上越タイムス」を手にするようになった。</p> <p>○ 新聞テキストの特徴・伝達効果への着目</p> <p>はじめ、出来事を時系列で記述したり、日記風に記述したりする表現が多かった。そのような時期に、圭太*1さんは、上越市直江津のイトーヨーカドー直江津店が閉店することを次のように伝えた。</p> <div data-bbox="507 1794 1433 2105" style="border: 1px solid black; padding: 5px;"> <p>イトーヨーカドーが5月12日閉店←大ニュースビックリ</p> <p>なんと、イトーヨーカドーが5月12日をもって閉店。ぼくは、この話を聞いてからざんねんな気持ちになりました。ぼくはざんねんな気持ちになりました。だから、イトーヨーカドーのげんてい商品を買いました。ぼくは、この、げんてい商品を食べていると、こんなことを思いました。それは、いままでがんばってきた味がしてきました。だからとてもおいしかったです。</p> <p style="text-align: right;">（圭太）</p> </div>



圭太さんのこの新聞を提示し、検討する授業を実施した。主に次の2点に注目した。

- ① 冒頭に使っている「なんと」の効果
- ② 残念な気持ちになったことを2回繰り返しているのはなぜか

「なんと」について、児童は、見出し「イトーヨーカドーが5月12日閉店」を矢印で指しながら「大ニュースビックリ」と強調していることと関連づけて、記事を書いた圭太さんが驚きをもって伝えたい意図が伝わると感じた。また、残念な気持ちになったことを2回繰り返しているのは、単純な間違いかもしれないが、結果として、圭太さんの残念な気持ちが強く伝わっていると考えた。これらの検討を通して、児童は、新聞のテキストについて、以下の2点が重要であると捉えた。

- ① 伝えたいことをより効果的に伝える書き方があること
- ② 伝えたいことをより強調して伝える書き方があること

新聞テキストの雰囲気をつかえた児童が、新聞を真似て記述し始めると、新たな表現がつけられるようになった。亮平さんが次のような記事を書いた。

えきまち上越フェアだいせいこう！

十月二十日に上越教育大学ふぞく小学校の三年一組のみなさんが「えきまち上越フェア」をかいさいしました。

「えきまち上越フェア」は三年一組のみなさんが作った工作や絵がかざられました。来られたみなさんはいろいろな物を見られたりしていました。貝がら売っている人も見られます。ダンボール雪月花に入って体けんする人もいました。とにかく大ぜいの方がこられました。「えきまち上越フェア」は、三年一組さんが作った電車も人を乗せて走っていました。

亮平さんは、ダンボール雪月花に入る体験役をしていました。「大人も子どもも関係なく入ってくれてよかった」と話した。そもそも「えきまち上越」は電車に乗ってお出かけするそうぞう活動なので、小さい子に人気のそうぞう活動です。

みなさんはお客さんがきて楽しんで行ってくれたので大成功と話しています。

(亮平)

新聞記者になり切って書いている。記事を書いている自分は「三年一組のみなさん」には含まれていない。

一文目及び第二段落は、記者の目を通した客観的な事実として伝えている。記者自身の目線からは表すことができない心情については、インタビューを通して伝えている。文中でインタビューを受けている「亮平さん」とは自分のことである。インタビューを受ける児童の自分と、インタビューを聞く記者の自分を分けながら、自分の感想を記事にしている。

また、隼人さんは次のようなテキストをつくった。

(見出し無し)

十月二十日(日)です。え～、三年一組でやっている「えきまち上越フェア」に来ています。「えきまち上越フェア」では、お店、ダンボール雪月花、えきまち急行、えきまち鉄道の運行です。どれも楽しそうですね～。あ！！もういっけんお店がありました。くじ引き屋さんです。お店で品物を買うと、くじ引きできる紙がもらえて、それをわたすと、一回くじが引けるみたいです。

今日は終わり。では、またよろしければ見てください。(隼人)

亮平さん同様に、自分自身を3年1組の児童ではない参加者として記事を書いている。隼人さんの場合、新聞記事というより、テレビやラジオのリポーター風の書き方と言える。見方を変えると、児童の生活環境の中に入り込んでいるであろう、情報機器を用いて撮影・編集した動画コンテンツの配信番組のようでもある。「どれも楽しそうですね」「くじが引けるみたいです」といった推測する表現を用いていることから、隼人さんのテキストも、3年1組の児童ではない人物が書いたテキストになっている。

亮平さんや隼人さんのテキストは、出来事を時系列で記述したり、日記風に記述したりする表現から、新聞の表現に移っていることが分かる。児童は、新聞のテキストの特徴として次のような3点を捉えたと言える。

- ① 記者の目線から客観的に事実を伝える
- ② 補足の情報は取材をして伝える
- ③ 心情はインタビューをして伝える

「えきまち上越フェア」の際に、木材とコンパネ、タイヤで製作した列車にお客さんを乗せて運行した圭太さん*²は、次のような記事を書いた。

乗せた！！えきまち急行、今回33人を

えきまち上越で運行している、えきまち急行のみなさん、今回の乗客の人数は33人の方を乗せたので、えきまちタイムスは、とてもそんけいしました。(圭太)

見出しに倒置を用いている。このことについて、「えきまち急行が今回33人を乗せた！！」の見出しとどのような違いがあるか検討する時間を設定した。通常の語順の方が内容を伝えやすいと感じる児童がいる一方で、倒置を用いることで、お客さんを乗せたことが強調されると感じる児童や、リズムがいいと感じる児童がいた。そこで、「今回33人を乗せた！！えきまち急行」という3つ目のパターンを提示し、「乗せた」こと、それが「えきまち鉄道」ではなく、「えきまち急行」であったこと、その乗客数が「33人」であったことについて考えた。

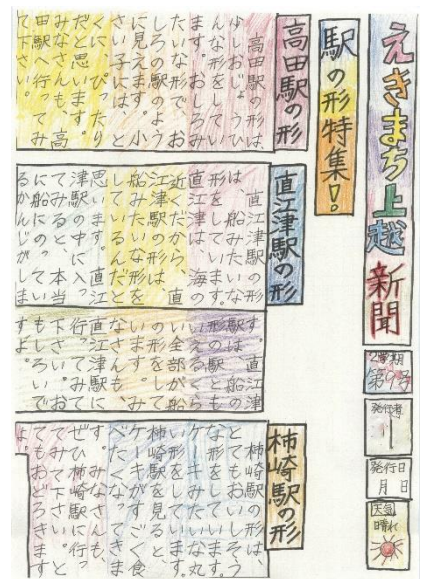
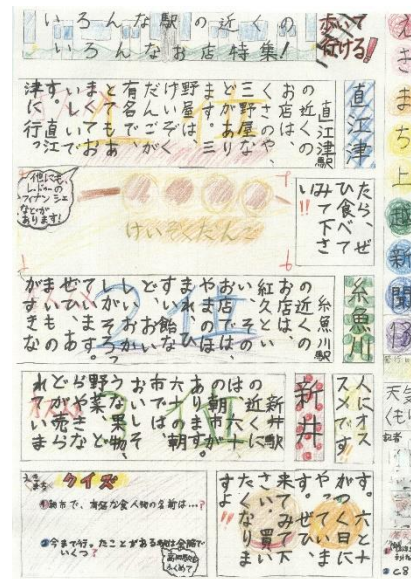
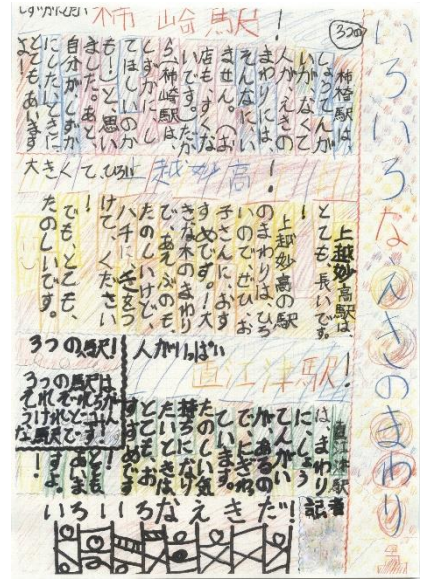
それぞれのパターンによって、伝わりやすい内容に違いがあることや、印象に残る内容に違いがあることなどに気づきながら、児童は、見出しの

工夫によって次のような効果があると捉えた。

- ① 目を引く（読みたくなる）見出しがある
- ② 伝えたいことを強調する見出しがある
- ③ 伝えたいことを早く教える見出しがある

○ レイアウトの特徴・伝達効果への着目

テキストと見出しの検討を通して、伝達を目的とする報告文の文体の特徴と伝達効果を捉えてきた児童とともに新聞づくりを継続しながら、レイアウトの工夫に着目した。



レイアウトに注目することを意図し、それまでに書いてきた体験の記事を伝える新聞を基に「特集号」をつくることに取り組んだ。テキストと見出しの工夫に加え、紙面全体を通じたタイトルを付ける必要が生じた。「駅のホームとくしゅう」「いろいろな駅のまわり」「いろいろな駅の近くの“垂歩いて行ける” いろいろなお店特集!」「駅の形特集!」など、児童は自分の興味や、読み手に伝えたい情報を整理し直して紙面づくりを行った。

「駅のホームとくしゅう」をつくった和也さんは、「○○駅のホーム」という見出しを統一し、紙面をおよそ六分割したブロックで5つの駅のホームを紹介した（上越妙高駅はJRの新幹線ホームとえちごトキめき鉄道のホームを紹介するために2ブロックを使った）。見出し、テキスト量、イラスト、レイアウトを統一し、自分が捉えた特徴を等しく紹介した。

優香さんは「いろいろな駅のまわり」を特集し、3段構成で3つの駅周辺を紹介した。自分が感じたそれぞれの駅周辺の特徴を込めた「しずかにしたい柿崎駅!」「大きくてひろい上越妙高!」「人がいっぱい直江津駅!」という見出しで読み手を引こうとした。

涼香さんや舞香さんは、和也さんと同様に、見出しとテキストの配置に定形をつくり、紙面全体の視覚的な伝えやすさを工夫した。また、文字や背景の配色や模様デザインの工夫することで、見出しとテキストのつながりを示したり、いくつかの記事を掲載しているのかを分かりやすくしたりした。言語による表現を支える非言語的な構成の重要性や効果に着目する児童の姿が見られた。

このように、児童は、記事のレイアウトに着眼することを通して、次のような効果を捉えていった。

- ① レイアウトの工夫と内容の伝わりやすさの効果
- ② レイアウトの工夫と紙面の統一感の効果
- ③ レイアウトの工夫と自分の新聞らしさを貫く効果

レイアウトを重視しながら新聞をつくる経験から、児童の新聞は見出し、テキスト、レイアウトを個別的・統合的に工夫するような総合的な言語表現として高まっていった。



	<p>それまでに行ってきた新しい経験や活動を伝える新聞づくりにおいても、効果的に情報を伝達する報告文としての新聞紙面づくりに取り組もうする姿が見られた。</p> <p>壁新聞を定型とした国語科学習活動を組織することには、体験や取材を通して得られた情報を整理し、よりよく伝達する構成や語句・語彙の運用を行うという表現における言語感覚と、実際の新聞紙面から言語機能のはたらきを感受する際にはたらく言語感覚という二側面において言語感覚のはたらきに注目することができたと考える。つまり、効果的な表現の形式や見出し語と本文との結束性や一貫性の捉えと、自身の表現への活用など、活動を通して、子どもが、どのように言語感覚をはたらかせながら報告文を感受し、自己の言語表現を創出するかという点を考察することができた。</p> <p>これらのことから、壁新聞を定型として、言語運用学習のモデルを構想することの効果として、子どもが、報告文という表現様式で言語を運用する際にはたらく言語感覚を二側面から捉えながら言語運用の能力を育成することが期待される。</p> <p>-----</p> <p>*1 児童名は、特に断りのない限り仮名である。</p> <p>*2 圭太さんは「えきまち上越」において、鉄道会社「えきまち急行」を運行し、「えきまち上越新聞」を「えきまちタイムス」の新聞名で発行した。「えきまち急行」とは別に「えきまち鉄道」を運行する児童がいた。</p>
<p>研究成果の発表状況</p>	<p>○上越教育大学附属小学校2019年研究会において活動公開及び協議会を行い、市内外、県内外の教育関係者に提案</p>
<p>学校現場や授業への研究成果の還元について</p>	<p>○本学学生授業に対する小学校現場での授業参観における活動公開</p> <p>○本学「初等国語科指導法」講義における資料化</p>

【提出期限】 令和2年3月31日（火）：厳守